

## Ⅲ 関係機関・識者から

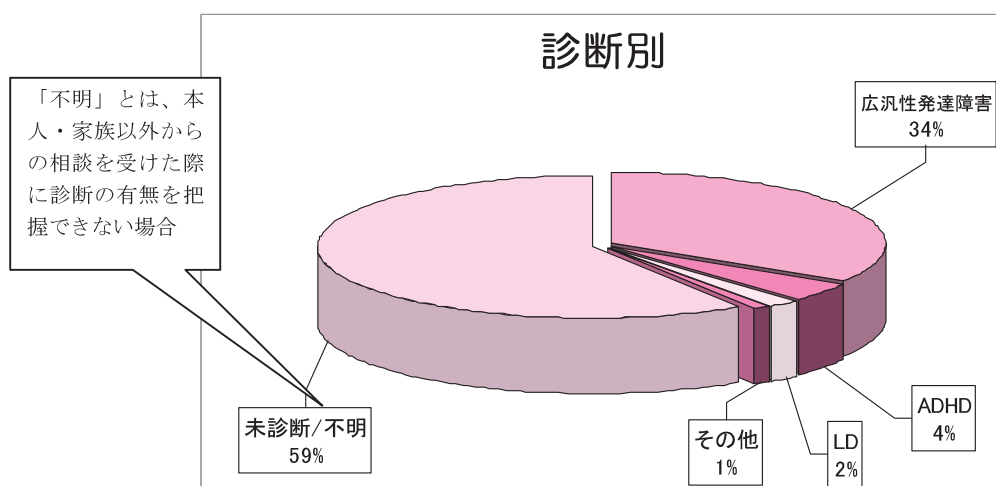
## 6 発達障害のある生徒の進路支援

～発達障害者支援センターポラリスより、発達障害者の就労支援を中心に～

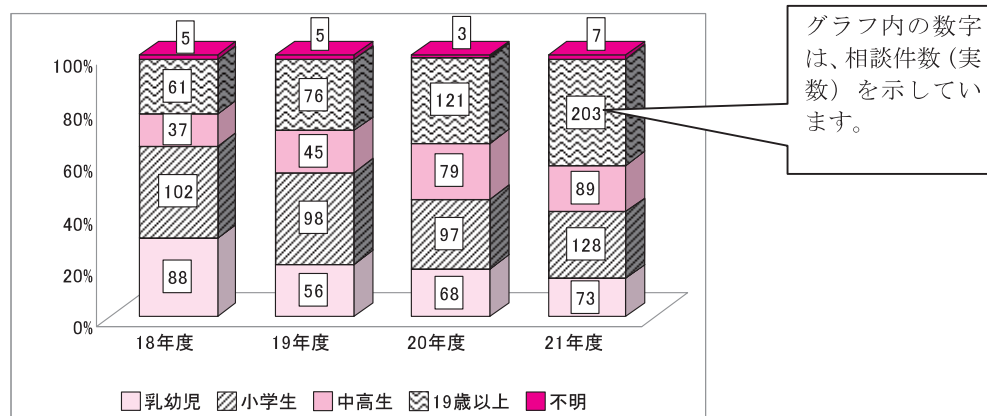
### ① 相談実績の分析

発達障害のある生徒にどのような進路相談が必要なのかを考えると、大人の発達障害者が社会でどのようなことにつまずき、悩んでいるのかをヒントにしてもらえたらと思います。ポラリスの相談を利用された方を診断別と年齢別にまとめたものから、簡単に分析してみました。

**診断別** 相談者の半数以上は未診断または不明です。「自分は発達障害ではないか」「家族が発達障害ではないか」という相談の多さが目立っています。発達障害がメディアや本などで啓発され広く世間に周知されるようになってきたことが、ポラリスへの相談につながっていると考えられます。また、診断を受けた人より未診断の人の相談が多いということは、特性に合った教育や支援が受けられない場合に、不適応を起こしやすいということも言えるかもしれません。



**年齢別相談件数推移** 年々、成人期の相談件数が増え続けています。不登校から引きこもりに至っているケースもあれば、大学卒業後、就職して不適応を起こしているケースなど背景は様々です。不適応のきっかけの多くは対人関係のこじれにあります。診断名で未診断・不明の次に多いのが自閉症スペクトラム（自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群などの広汎性発達障害を、はっきりとした境界線が付けにくい連続体として捉えたもの）であることから、自閉症スペクトラムは現代社会での生きづらさをかかえていると言えるのかもしれません。



## ② 青年・成人期の相談内容から見えてくること

青年・成人期の相談の内容を詳しく検討してみましょう。ポラリスでは相談内容から、生活支援群と仕事提供群、就労支援群という3つのタイプに分類して支援を考えます。

生活支援群とは、家以外の場所へ定期的に通うことに課題のある人です。過去に失敗経験が重なり、対人関係に不安を持ち社会生活が困難な人、興味の幅が狭く自分の好きなことだけをして生活している人などです。この群の方は今までの生活の中で成功体験を持つ機会が極端に少ないことが共通しています。安心して通える場所でサポートを受けながら成功体験を重ね、自己肯定感を持てるように支援していく必要があります。自信を回復するには長い期間が必要です。

仕事提供群とは、学生時代は登校に問題なく、生活リズムを整える基盤はあるが、仕事やアルバイト経験がほとんどないという人です。この群の方には、仕事では与えられた業務を会社のルールに従って行うことや職場のマナーや決まりを守る必要があることを伝えていきます。学生時代とは違う社会人としての枠組みを知ってもらいます。他機関と連携して実習場面で体験しながら習得を目指すように支援する場合があります。

就労支援群とは、「就職したい」と単に言うだけではなく、職場から指示されたことを実際にやろうとする方です。就労意欲や職場マナーへの関心が高く、与えられたことに対する従順さや、「事務職以外は嫌」などという仕事に対する固定観念をもっていない方です。この群の方には、他機関と連携して就職を具体的に支援したり、すでに就労している人に対しては仕事上の工夫や対人関係でのトラブルを解決するための具体的な助言をしたりすることが主な支援になります。

## ③ 発達障害者の自立に有効なスキルを考える

社会で自立する力とは何なのか、教育現場で学力以外に身に付けておきたい課題は何かを考えてみたいと思います。

### 課題1：基本的な生活習慣を身に付ける

外食、買い物、身だしなみや公共交通機関の利用といった自立生活をするためのスキルを、社会経験を通して習得しておく必要があります。自立生活のスキルは就職してから教えてくれるものではありません。就職する前にぜひ身に付けておきたい力です。また、お金を自己管理できる力も必要です。自分が稼いだ収入以上に支出が多ければ生活は成り立ちません。1か月間をうまくやりくりする力、欲しいものはお金を貯めて購入するなどのスキルも必要です。課題を期限までに提出することや、与えられた仕事を監督がなくてもやり遂げることなども、社会に出てからは当然求められる基本的な力です。

発達障害者はその特性から、自分の興味のあることにのみ没頭しやすく、一度身に付いてしまった習慣を自力では変えにくい人が多いです。例えば、ネットゲームや深夜番組にはまってしまうと過度に集中してしまったり、依存から抜けられなくなったりして昼夜逆転の生活になることがあります。昼夜逆転の生活が良くないことはわかっている、自分ではやめることができなくなります。朝、決まった時間に行く場所があり、そこで本人にとって有意義な活動をすることが重要です。自分にとって優先順位の低いことにモチベーションを持ち続けることは苦手だからです。

## 課題2：適切に自己理解ができている

発達障害者は自分を客観視することが苦手です。周囲に認められたいと強く望んでいるのに、場に合った行動がうまくとれず、笑われたり叱られたりといった経験をしてしまうことがあります。問題は、笑われたり叱られたりした理由がわかっていないことです。そのため、自信をなくしてしまったり、どうすればうまくいくかを自分では見つけられなかったり、人に会うことに不安をつのらせてしまったりということにつながります。「自分は、これはできるがこれはできない」という、自分の適性に対する理解が困難であり、理想と現実のギャップを埋められずに現実的な一歩を踏み出せなくなってしまう場合もあります。万能な人間はいないというふうに自分の得意なことと苦手なことを適切に理解していることは、うまく社会に適応できることに繋がります。

## 課題3：問題解決のためのコミュニケーション力が身に付いている

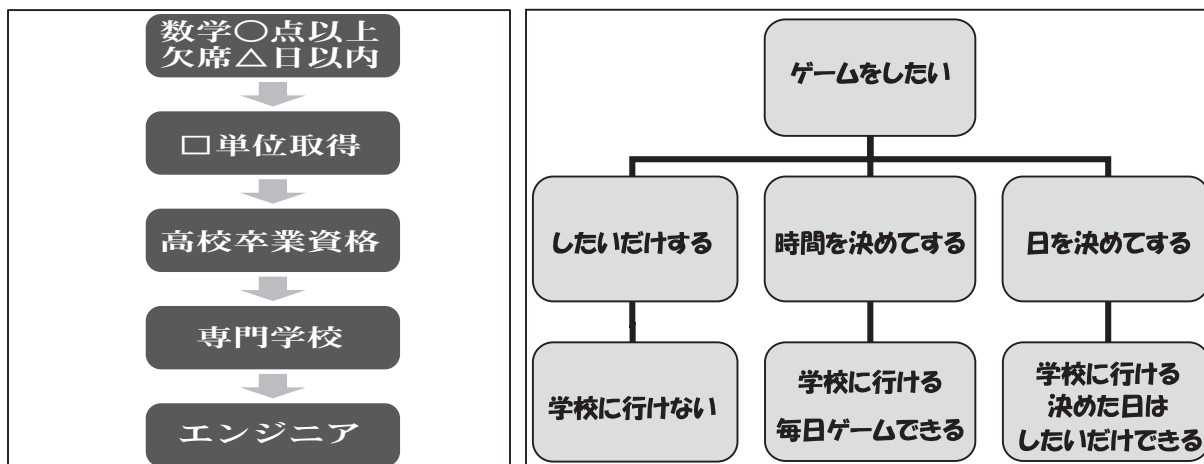
知的障害がない発達障害者は一見ことばでのコミュニケーションに不自由があるようには見えません。ところが、適切に挨拶・返事・質問・報告・連絡・相談するといったことが苦手な人が多くいます。「できません」「わかりません」「教えてください」などの助けをうまく出せない場合、社会の中で追いつめられたり低く評価されたりしてしまいます。ことばでのコミュニケーションが可能であるがゆえに、周囲からは障害が見えにくくなっているのです。どんな場面でもどのことばを使えばいいのかは具体的なアドバイスと練習が必要です。困ったときに相談できる相手を持ち、サポートを受けて問題解決の成功経験を持つことは、社会に出てからも必要時に周囲から支援を受け問題を解決していくことに繋がります。

## 課題4：ストレスと上手く付き合える力が身に付いている

現代はストレス社会と言われ、誰でも生活していく中でストレスを受ける時代です。発達障害があると、さらに思いこみや勘違いによる対人ストレスがかかります。感覚過敏等の特性からくるストレスを受ける方も少なくありません。ストレスを受けた際に、うまく気持ちを切り替えられるような方法を持っていることが必要です。また、感覚過敏等に対しては、「自分には感覚過敏がある」と自己理解ができていることと自分に合った対策を持っていることが大切です。感覚の問題は、努力不足やわがままではありませんので、周囲に理解してもらうことも必要になるかもしれません。ストレス発散方法を持っていることと、ストレスを最小限にする工夫を持つことは社会生活を営むにおいて必要不可欠なスキルです。

#### ④ 進路支援において大切なこと

発達障害の傾向のある人は体験を通して学習する方が多いです。未経験なことをイメージしたり、今は良いけど将来困るからといった漠然としたアドバイスでは納得しにくく、具体的な行動に繋がりにくいです。進路相談ではできるだけ具体的な資料を準備し、面接や書類の書き方等は実際に練習することが必要でしょう。今やらなければならないことは将来どのようなことに繋がっていくのかを、見てわかるようにフローチャートなどの図（下図参照）にして示すなどの工夫も効果的です。



ネットやメディアなどから入手した情報が判断の基準になってしまい、「〇〇は負け組」「大学なら△△」と決めつけてしまう人もいます。「自分には何が向いているか」「どんな生活をしたいか」といった将来設計を立てることは経験が乏しいと難しく助けが必要です。社会活動の中で様々な経験をした方は、具体的な目標を設定できる場合が多いです。

発達障害者に向いている仕事があるわけではなく、個々の特性と身に付いているスキルによりチャンスには大きく差が出ます。繰り返しになりますが、公共交通機関の利用や外食、買い物などの生活スキル、挨拶、返事、質問、報告、連絡や相談などのコミュニケーションスキル、指示通りに実施する、手順を守る、丁寧に作業するなどの作業スキル、遅刻しないことや言葉遣いなどの職場マナーを在学中の教育活動の中で身に付けておくことが、社会人として社会に適應することに役に立ちます。

この冊子を読まれた方の中には、言われるまでもなく上記のような内容は教育目標に盛り込まれていたと感じられた方も多いと思います。ところが、残念なことに発達障害のある生徒の中には、集団の中で失敗から学ぶという方法では身に付かない人が多いのです。学び方に個性があり、配慮と工夫が必要です。3年生になってからではなく、入学と同時に個別のアセスメント（将来を見越した支援計画を立てるために、発達評価に加えて、現在の能力の測定及び行動の観察などの情報を合わせて評価すること：入学前の情報、家庭からの情報、関係機関からの情報、各種検査など）を実施し、時間がかかってもしっかりと本人に身につくような指導計画が求められているのではないのでしょうか。

## 7 【寄稿】より良い支援体制の構築に向けて

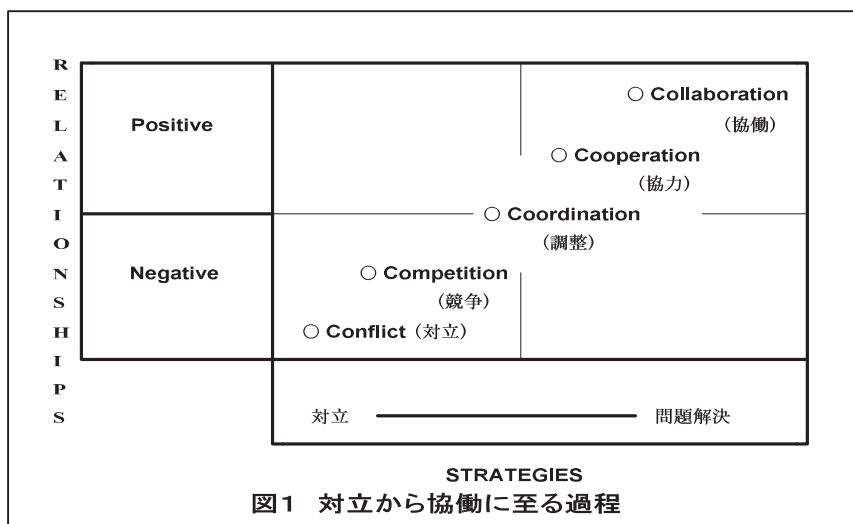
～和歌山大学 教授 武田鉄郎～

本書には、高等学校における特別支援教育の在り方や、発達障害のある生徒の特性が理解しやすく提示されています。また、和歌山県の高等学校における特別支援教育に関する調査結果を分析し、現状と課題が挙げられています。これらの結果や思春期の発達障害の生徒の実態を踏まえ、質の異なる3つの支援のレベルから実践事例をもう一度見直し、なおかつ問題発生を予防するという視点で指導・支援をまとめてきました。本書の最大の特徴は、この3つの支援のレベルに基づいたところにあると考えています。

発達障害とは、中枢神経系の高次機能の障害が発達期に生じているものをいいます。基本的には非進行形であり、合併症がない限り障害自体は悪化していくことはないものです。しかし、状態像としては成長するとともに不登校等の不適応状態を呈することが多い。それは発達障害のある人には、周囲の人々すなわち環境要因との相互作用の中での失敗経験が多く、それらの経験が「心の傷」となって残り、不適応に陥っていくのです。私たち教育に携わる者は、「生きにくさ」を抱えている生徒に対して、全校を挙げてその実態を把握し、支援体制を構築していかなければならないと考えます。

十分な支援体制がなければ不適応状態に陥り、二次的な障害として身体症状や行動上の問題が出現してきます。身体症状として出てくる場合は、頭痛、めまい、チック、過換気症候群、過敏性腸症候群、円形脱毛症などがあげられます。また、精神面の問題としては、不安障害、適応障害、強迫性障害などがあげられます。行動上の問題としては、選択性緘黙<sup>かんもく</sup>、抜毛<sup>ぼつもう</sup>、不登校、拒食などの個人内にとどまる問題と、周囲に迷惑を及ぼす暴力、非行などの外に向かう攻撃的な問題があげられます。攻撃的、非行的行動が重篤化すると反抗挑戦性障害、行為障害にまで発展する可能性もあります。これらの行動のうち、個人内にとどまるものは「非社会的行動」といい、他者の行動を妨害することのない集団への不適応行動であるとされています。周囲に迷惑を及ぼす場合は「反社会的行動」といい、他者の行動を妨害する可能性のある集団への不適応行動であると定義されます。

発達障害のある生徒は、思春期特有の情緒の不安定さと発達障害特性からくる生きにくさが二重に重なり合って、二次的な障害を併発しやすいのです。支援体制を構築し、支援を継続していくためには学校内外の連携を図っていくこと(協働)が大切になります。



協働とは、図1で示したように、問題解決性が最も高まる関係で、積極的で良好な担当者同士の関係性が重要であることが理解できます。専門家がそれぞれの立場から、真剣に子どもの問題解決をしていく過程では、対立から、競争、調整、協力、協働という段階的な関係性の変化が生じます。対立解消の基本的な概念は、図2のように譲歩することでも、説得することでもありません。もちろん、回避したり妥協することとも違います。問題解決のために自分の主張も他者の主張も同様に尊重し、同じ目標を共有することが大切です。教育関係者、医療関係者、福祉・労働関係者等が協働チームを結成し、積極的に相互依存していくことが求められます。協働チームは、お互いの専門性を重視し、共通の目標を持ち、平等性を保ち、責任や成果に対する責任も全員で共有します。協働ができる条件としては、本質を見極める力、柔軟な思考、協調的な関係の3つが重要です。生徒や家族の問題解決を図るためには、組織の柔軟でかつ協調的な対応が望まれます。そして協働の核となるのが「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」であります。

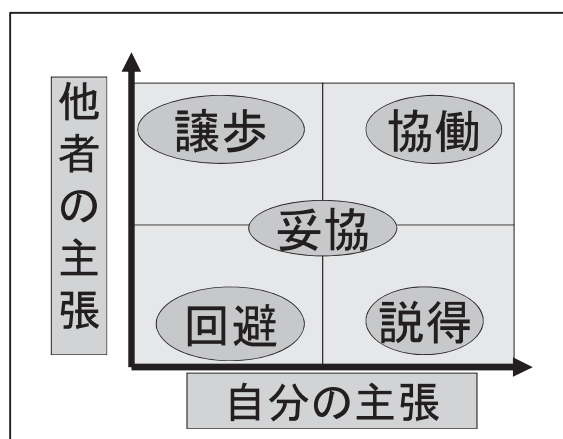


図2 対立解消のための概念図(堀, 2003)

最近、発達障害はマスコミに取り上げられることが増え、多くの人に知られるようになってきました。しかし、正しく理解している人はまだ少ない。発達障害が正しく理解され、周囲の人々が適切な配慮と対応を行うことができるようになれば、発達障害のある人々の適応が進み、その力を発揮できるようになるものと考えます。当事者や家族の苦しみもかなり軽減されるはずです。本書を編集するにあたっては、保護者の方々からも協力していただきました。保護者として配慮してほしいことも具体的に掲載されています。

今後の課題として挙げられるのは、本書ではADHD等に併発しやすいと言われている攻撃的、非行行動に関する事例がほとんど扱われていないことです。今後、二次的な障害として、著しい行動化(反抗挑戦性障害、行為障害)に対する事例研究を推進し、その予防と指導・支援についても整理・検討していく必要があると考えます。

【文献】

堀公俊(2003)問題解決ファシリテーター。東洋経済新報社。

武田鉄郎(2010)特別支援教育の推進と、現状における課題。教育と医学,PP4-12。

Wallance, M., & Hall, V.(1994)Go collaborative! Subvert reform for the sake of the children. *Support for Learning*, 9(2), 68-72.